

世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館(2)

ラバディエ・コレクションとルーサー記念図書館

五十嵐 仁

はじめに

今回から、世界の労働関係研究所・資料館・図書館についての紹介を始めることにする。しばらくは、アメリカの図書館や研究所の紹介である。それも、西部ではなく東部に限られている。今回の海外研修では、西部に行く余裕がなかったからである。

今回は、このうち、デトロイト近郊の二つの大学にある専門図書館を紹介することにしよう。それは、ミシガン大学のラバディエ・コレクションとウェイン州立大学のウォルター・ルーサー記念図書館である。

前者は、デトロイトから高速バスで1時間ほどのところにあり、後者は、デトロイトのダウンタウンの北側に位置している。ここを訪問したのは、デトロイトで開かれたレイバーノーツ Labor Notesの大会⁽¹⁾に出席するついでであった。レイバーノーツというのは、アメリカ労働運動の民主的改革と再活性化をめざす労働組合の活動家集団で、『レイバーノーツ』という月刊誌を出している。ウェブ・サイトもあるので、詳しくはそちらを参照していただきたい

⁽²⁾。

大会は2001年4月21日からで、その前日の20日の夕方から受付が始まった。私がラバディエ・コレクションを訪れたのは、さらにその前日の4月19日で、ルーサー記念図書館の訪問は4月20日の午前中のことである。

ミシガン大学とハッチャー大学院図書館

朝早くボストンのローガン空港を出発して、昼前にデトロイト空港に到着した。ミシガン大学のキャンパスは、大きく3カ所に分かれている。ラバディエ・コレクションはそのうちのどこにあるのか、空港から電話をして確かめた。

電話に出たのはジュリー Julie Herradaさんという女の方で、ラバディエ・コレクションの責任者である。ラバディエ・コレクションのあるのは、真ん中のキャンパスのハッチャー大学院図書館 Hatcher Graduate Library という8階建ての建物の7階だという。この建物は全体が図書館で、上階には特別コレクションがあり、その一部がラバディエ・コレクションである。

7階でエレベーターを降りたら、入り口の前が展示室になっている。シェークスピア関連の

(1) この大会の様子については、拙稿「海外通信 レイバーノーツ2001年大会とチームスターズ民主化同盟」『大原社会問題研究所雑誌』第516(2001年11月)号、参照。

(2) レイバーノーツのウェブ・サイトについては、<http://www.labornotes.org/>を参照。



7階にラバディエ・コレクションのある図書館

資料もあるということで、舞台衣装などが展示されていた。2000年9～11月には、ラバディエ生誕150周年を記念して、ここで関連資料を展示したという。

展示室を一渡り眺めて、「special collections library」という表示のあるドアの前に行った。今回の海外研修で、この種の専門図書館を訪問するのはこれが初めてである。ちょっと緊張したが、一呼吸置いて、思い切ってドアを開けた。

中は閲覧室になっていて、机と椅子が並んでいる。入り口横の机に係の人が座っていた。この人が、電話に出てここまでの経路を説明してくれたジュリーさんである。

ジョー・ラバディエとそのコレクション

ジョー・ラバディエというのは、この地で生まれて活動したアナーキストの名前である⁽³⁾。ここコレクションは、ラバディエ氏が集めて寄贈した資料の他に、アナーキスト関係を中心とした政治・社会運動関連の資料を収集している。

ラバディエの正式な名前は、チャールズ・ジ

ョセフ・アントワーヌ・ラバディエ Charles Joseph Antoine Labadieだが、親しみを込めてジョー・ラバディエと呼ばれている。彼は、フランス人とネイティブ・アメリカン（いわゆる「インディアン」）の子孫を両親とする農民の子として、1850年にミシガン州で生まれ、インディアナ州で印刷技術を学んだ。10代で印刷工組合に入り、その後数年間、各地を転々とした後、1872年にデトロイトに落ち着いた。1878年に、ラバディエは労働騎士団Knights of Laborの最初のミシガン支部を組織し、労働運動の行動的な活動家としてのキャリアを開始するのである。

ラバディエ・コレクション⁽⁴⁾は有力なデトロイトのアナーキストとなったラバディエが自分の図書をミシガン大学に寄贈した1911年に設立された。このコレクションは、当初、主としてアナーキズム資料（アナーキズムに関する資料としては今でももっとも充実している）に関するものだったが、その後拡大し、今では、人種的少数者を含む市民的自由、社会主義、共産主義、植民地主義、帝国主義、1930年代のアメリカ労働史、IWW（世界産業別労働組合）、スペイン内戦、性の自由、女性の解放、ゲイの解放、地下新聞、学生運動などに関する文献や資料がコレクションに含まれている。

ラバディエ・コレクションには、3万5000冊の本、8000点の定期刊行物（約800タイトル）があり、パンフレット、リーフレット、クリップ、コピーを含む約6000主題のファイルが収蔵されている。700枚のポスターやイラストもあり、それらの多くは、1995年のオンライン展示「アナーキストイメージ：ラバディエ・コレク

(3) ジョー・ラバディエとその活動について、詳しくは、Carlotta R. Anderson, *All-American anarchist : Joseph A. Labadie and the labor movement*, Wayne State University Press, Detroit, 1998. を参照。

(4) ラバディエ・コレクションについて、詳しくは、<http://www.lib.umich.edu/spec-coll/labadie/>を参照。

ションのポスター⁽⁵⁾」で使用された。同様に、コレクションには多くの写真もあり、その大部分は、アナキスト運動で著名な人々の肖像写真である。1999年に、ミシガン大学デジタル・ライブラリー・イニシアチブの援助によって、この写真コレクションはデジタル化され、ウェブに掲載された。

このほか、数は少ないが、漫画、シートミュージック、ボタン、バンパー・ステッカー、腕章がある。115の手書き原稿のコレクション、数百のレコード、演説や討論、聞き取り、歌のテープ、ビデオとコンパクトデスクなどもこのコレクションに含まれている。

書庫の中

受付にいたジュリーさんに訪問の趣旨を話して、書庫の中を案内していただいた。入り口近くには、整理途中の本に札を挟んだりしてずらりと並べてあった。窓際の明るいところに本や資料を整理するデスクが並んでいる。学生のアルバイトなども雇ったりするそうだ。

棚にはズラリと本や雑誌が並び、資料の入ったファイル・ボックスがあった。ダンボール箱が重なっていたりしているところも、大原研究所の書庫の中と良く似ている。同じような資料を集め、同じように整理するという、同じような仕事をしているから、似ているのも当然だろう。ジュリーさんも、途中で会った職員に、「ここと良く似た日本の研究所から来た人だ」と言って私を紹介してくれた。

その人は、「ウェイン州立大学にあるルーサー記念図書館を知っているか」と聞いてきたので、「知っています。明日の午前中に行きます」と言ったら、ニッコリした。また、「大原研究

所はここと同じでIALHI (International Association of Labour History Institutions) の会員ですが、IALHIをご存知ですか。私がここに来たのは、レーバーノーツの大会に出るためです」と話したら、大喜びされた。IALHIもレーバーノーツについても、二人ともよく知っていた。

手紙や手稿なども見せていただいたが、ダンボールのファイルに綺麗に整理されていた。このファイリング・ボックスは、特別注文だそう。また、ポスターも見せてもらったが、大原研究所と同様に抗酸性の透明な保護用紙に包まれていた。大きさは様々だったが、これは機械でカットして梱包したのだそうで、そのための部局が大学の中にあるという。

このほか、IWWのバッジやユージン・デブスの写真なども見せてもらった。一時間以上もかけて丁寧に案内してもらい、感謝の言葉もない。

ルーサー記念図書館とウォルター・ルーサー

ラバディエ・コレクションを訪問した日の夕方、ミシガン大学のある大学町アン・アーバーから、高速バスに乗ってデトロイトに戻ってきた。「戻ってきた」というのは、2001年のクリスマスに、デトロイトを訪問していたからである。このときはすさまじい寒さで、町は一面の雪に覆われていた。12月25日のクリスマスの日には、ほとんどの施設やお店が休みになり、寒さを避けて教会に逃げ込んだことを思い出した。

4ヵ月ぶりの再訪だったので、グレイハウンドのステーションも、デトロイトの町並みも、そしてホテルのBEST WESTERN

(5) 「アナキストイメージ：ラバディエ・コレクションのポスター」のウェブ・サイトは、<http://www.ipl.org/div/labadie/intro.html>である。

DOWNTOWN DETROITも、皆見覚えがあった。何だか、懐かしいような奇妙な気持ちになった。さびれた感じだった中心部の再開発工事も進んでいるようで、塀で囲まれた工事現場の一部が更地になり、駐車場に変わっている。グリークタウンで名物のシシカバブとフレイミング・チーズを味わい、帰りにはピープル・ムーバーと呼ばれる自動運転のモノレールに乗ったが、車中から見た町は暗く沈んでいるように見えた。

さて、4月20日は朝からのあいにくの雨であった。この雨の中、ウォルター・P. ルーサー記念図書館Walter P. Reuther Library⁽⁶⁾に出かけた。これは、ダウンタウンの北の方に位置するウェイン州立大学のキャンパスの中にある。

雨の中、図書館の建物の写真を撮った。ここに写っている4階建ての建物全体がルーサー記念図書館で、その規模は大原研究所よりもずっと大きなものである。



ルーサー図書館の建物

ウォルター・フィリップ・ルーサーWalter Philip Reutherというのは、アメリカ労働運動の指導者で元CIO会長の名前である⁽⁷⁾。彼は、1907年に、ドイツ移民の労働組合幹部の子供として、西ヴァージニア州で生まれた。自動車工としてフォードの工場働きながら、ウェイン州立大学の前身であるシティ・カレッジCity College of Detroitを卒業している。彼の名前が図書館につけられているのは、このような経緯もあって資金援助を受けたためだと思われる。

ルーサーはデトロイトの自動車工場働きながら労働組合運動に従事していたが、1932年に解雇され、イギリス、ドイツ、ソ連、インド、日本など、世界を一周した。35年の帰国後、機械工としてゼネラル・モーターズに入り、大ストライキを指導した。46年には全米自動車労組(UAW)の会長に選出され、52年にCIOの会長となる。55年のAFLとの合併後は、AFL・CIOの副会長となるが、ミーニー会長との対立から68年に脱退し、チームスターズと共に新しい労組を結成した。70年に航空機事故で不慮の死を遂げている。

このルーサー氏にちなむこの図書館は、地元自動車産業の労働組合資料をはじめ、労働組合関係の資料を沢山収集している。特に充実しているのはUAW関連のものであり、主な部局、地域支部Local、地区組織Regionの資料がそろっている。このほか、主なものには、CIO、IWW、AFA(飛行機乗務員協会)、AFSCME

(6) ルーサー図書館について、詳しくは、<http://www.reuther.wayne.edu/>を参照。

(7) ウォルター・ルーサーについて、詳しくは、Jean Gould and Lorena Hickok, *Walter Reuther : labor's rugged individualist*, Dodd, Mead, New York, 1972, Victor G. Reuther, *The Brothers Reuther and the Story of the UAW*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1976, Anthony Carew, *Walter Reuther*, Manchester University Press, Manchester, 1993, Nelson Lichtenstein, *Walter Reuther : the most dangerous man in Detroit*, Basic Books, New York, 1995,などを参照。

なお、最後の本の副題に「デトロイトで最も危険な人物」とあるのは、「ウォルター・ルーサーは、現存の社会形態を混乱させないかのようなそぶりでは誰よりも巧みに革命を引き起こすが故に、デトロイトで最も危険な人物だ」という、全米自動車製造業協会のジョージ・ロムニーの言葉(1945年)から取られている。

(アメリカ地方公務員組合), AFT (アメリカ教員連盟), ALPA (航空パイロット協会), SEIU (国際サービス従業員組合)などの資料がある。

この図書館は1960年に設立され、デトロイトの都市問題や歴史に関する資料も収集・保存している。現在、1600の個人と組織の文書や資料、200万点以上のオーディオ・ビジュアル・コレクションを含む、のべにして7万5000フィート(22.5km)の資料を所有している。

書庫や事務室などの様子

ここには事前にEメールを送り、ダニエル(ダン)・ゴロドナー Daniel Golodner氏を尋ねるよりの返事があった。約束の10時に伺うと、にこやかにダンさんが現れた。閲覧室で、私の質問に丁寧に答えてくれた。

その後、書庫の中を案内していただいた。この中には、どのような閲覧者も基本的には入れないそうだが、私は特別に案内していただくことができた。それは、法政大学大原社会問題研究所からの来訪者だったからである。

大原研究所について、ダンさんはその名前を知っていただけでなく、ウェブ・サイトの充実ぶりにもいたく感心していた。後で知ったことだが、彼はルーサー記念図書館のサイトの責任者(Web Developer)だった。これは今も変わっていないようで、サイトについてのコメントの宛先は彼あてになっている。

書庫の中には、ファイリング・ボックスがぎっしりと並んでいた。このファイリング・ボックスは、前日に訪問したラバディエ・コレクションで使っていたものと同じで、特注品だという。これを作っている会社は全米でも2~3社で、「とても高い」とダンさんはこぼしていた。

本は受贈したもの以外はないそうで、収集しているのは労働組合の第1次資料がほとんどである。したがって、資料は閲覧室での閲覧のみ

で、貸し出しはしていない。利用者の資格は問わず、どこからでもコピーサービスに応ずるそうだ。

資料は、ダンボール型の箱にも入れられている。蓋が付いていて簡単に開けられ、そのまま閲覧室で見ることができる。もちろん、中の資料は整理され、ファイルされている。書庫の他にも、資料を整理する部屋をいくつか見せていただいた。映像資料などを整理する特別の部屋があり、そこで変わった器具を目にした。それは、丸まったり、変な癖がついたりした写真などを平らにする器具である。資料をこの中に入れて皺を伸ばすと言っていたが、実演を見たわけではないので、実際にどうするのかは良く分からない。

作業台の上には、整理途中の写真が沢山乗っていた。写真やポスター、フィルムなどの映像関係の資料も、かなり所有しているようだ。この作業室の近くに、写真やポスターなどを保管する部屋が一部屋あった。中にはキャビネットがずらっと並んでいたが、幅の小さい方が写真で大きい方がポスターなどだそうだ。

さらに驚いたのは、フィルムやテープを保管する部屋が書庫とは別にあるということである。中に入ったら、テープがズラリと並んでいた。職員のオフィスにも案内していただいた。大部屋だが、各自のデスクはボードで仕切られ、半分独立している。ここには、ダンさんのデスクもある。

エレベーターの陰になっていて入ってきたときには気がつかなかったが、全米自動車労組(UAW)のウッドコック会長についての展示がなされていた。その横には、展示のパネルを作成するための特別の作業室があり、専任の職員が次の展示のための作品を作っていた。このフロアの展示は1年に1回作り直すそうで、労働組合などにも貸し出すという。次は看護婦

の組合だということで、作成途中のものを見せていただいた。この作業室の奥は倉庫のようなものになっていて、UAWの太鼓や旗など、いわゆる「現物資料」(あちらでは「三次元資料」と言っていた)などが保管されている。

この他、ここには最大50人までが入れるセミナールームがあり、学生の授業などでも使われているそうだ。ここに先生と学生がやってきて、実際の資料などを見ながら授業を受けるわけである。さらに、テーブルが4つほどの休憩室があり、教員の研究室も6~7室ほどある。この部分は、UAWからの特別基金1000万ドル(約1億2000万円)の寄付を受けて建て増したという。ダンさんは資金やスペースの不足を問題点として挙げていたが、大原社研に比べれば大変恵まれていると言えるだろう。

その理由の一つは、前述のような労働組合か

らの資金提供である。それは日常的にもなされ、ダンさんなど3人の職員は組合が人件費を負担して雇用しているのだという。ダンさんの場合にはアメリカ教員連盟からの派遣で、主としてその組合の資料整理を行っているようだ。ただし、それだけをやっているのではなく、前述のように、ウェブ・サイトの作成も担当しており、彼の他に3人の職員が作成に関わっているようだ。

こうして、丁寧に説明し、図書館の中をくまなく見せていただいた。一通り終わって時計を見たら12時を過ぎていたから、2時間以上もかけて説明してもらったことになる。その規模の大きさと充実ぶりに驚いた2時間余であった。

(以下、続く)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所

教授)

<p>● 濟州島からの渡日過程と大阪での人々の営み!! 伊地知紀子著 五六〇〇円</p> <p>● 生活世界の創造と実践 韓国・濟州島の生活誌から 五世紀末以降の濟州島村人の生活実践をとおし構造化という マクロな社会変化に対する個人の主体的対応の可能性を考察。 ● アジア社会の基層にあるクラスメントの特性を解明 吉原直樹著 五三〇〇円</p>	<p>● アジアの地域住民組織 町内会・街坊会・ RT/RW 日本の町内会、香港の街坊会、インドネシアのRT/RW、 アリサン、PKKに焦点を据え住民組織の構造的特質に迫る。 橋本和孝・吉原直樹編著 三八〇〇円</p>	<p>● 都市社会計画と都市空間 盛岡市の まちづくりを中心に ● 序／橋本和孝・盛岡市の都市空間の特徴／初澤敏生・中西典子・吉瀬雄一・ 大久保武・盛岡市の都市行政／橋本和孝・大久保武・盛岡市の地域住民団 体とまちづくり／吉瀬雄一・吉原直樹・盛岡市の女性団体とまちづくり 竹村祥子・盛岡市の子どもの都市環境システム／竹村祥子・盛岡市の高齡 者の都市環境システム／中西典子・都市社会計画の可能性と課題／吉原直樹 丸山茂著 四六〇〇円</p>	<p>● 家族のレギュラシオン 多元主義の法社会学 新たな社会編成原理の再構築をめざし家族認識の方法、福祉 国家論、家族法観念の変容、日本社会の家族問題等を検証。 山田千香子著 六五〇〇円</p>	<p>● カナダ日系社会の文化変容 「海を渡った村」三世代の変遷 カナダへ移住した人々とその子孫にとって移民経験やエスニ シティは何であるかを日・加両国における聞き取り調査で探求。 スミスナウイスウエル／河村望・斎藤尚文訳 三八〇〇円</p>	<p>● 須恵村の女たち 暮しの民俗誌 エンブリーによる農村調査に同行したエラウ夫人がとらえた60 年前の農村女性群像。日本農村研究の歴史的名著の完訳。 小内透・酒井忠真編著 A5判 三九〇頁 六八〇〇円</p>	<p>● 日系ブラジル人の定住化と地域社会 群馬県太田・大泉地区を事例として 出稼先から定住へ、新たな局面を迎える外国人労働者問題に迫る。 高齡在日韓国・朝鮮人 大阪における「在日の生活構造と高齡福祉の課題」 庄谷怜子著 定住外国人である韓国・朝鮮人社会の変貌過程をもとめての経済基 盤・生活構造・福祉の課題を総合的に分析 七八〇〇円</p>
--	---	---	--	---	--	---

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751 / http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/ ▶価格は税別◀